



ICT 海外ボランティア会会報 No. 95

2020年12月1日(火)

URL: <https://ictov.jimdo.com>

EML: info.ictov@network.email.ne.jp

目次

◆特別寄稿

[個人と社会](#)

[東京大学名誉教授](#)

[当会顧問](#)

[吉田 眞氏](#)

◆特別寄稿

[徒然日記\(11\)](#)

[当会特別顧問](#)

[石井 孝氏](#)

◆海外グラフィティ

[「傍観者の時代」を読んで](#)

[ニシン御殿残照](#)

[ちょっといい話](#)

[日本ベンダーネット社長](#)

[エッセイスト](#)

[田上 智氏](#)

◆海外便り

[南イタリア俳柳紀行\(1\)](#)

[元 JICA シニア海外ボランティア](#)

[北垣 勝之氏](#)

◆第4回 ICT 海外情報ウェブサロン模様

[事務局](#)

◆第5回 ICT 海外情報ウェブサロン開催のご案内

[事務局](#)

個人と社会

当会顧問
東京大学名誉教授
吉田 眞



投稿者は、海外や日本の非営利の諸機関・団体で活動しその運営に永年参加してきて、西欧と日本の考え方、行動様式について数多くのことを体験し学ぶことができた。本稿では、これらの経験と日頃感じることに基づいて、個人的な見解を述べる。

本稿は、COVID-19 が深刻化する前にまとめたものを元としている。本稿ではこれに若干の考察を追加しているが、現時点で COVID-19 の種々の影響が進行中であり、今後については今の段階では予想できない。このため、今後長い期間のフォローが必要と考えている。

(注) 本稿は、一般社団法人「日本オープンオンライン教育推進協議会」のメルマガに掲載された内容に加筆修正を加えたものである。

1. 西欧と日本

(1) 流動 vs 定住

西欧では、歴史的に多民族が相互に接し、移動し、混在し、生活・政治・経済環境が常に流動的であった。このため、個人・集団・社会間での意思疎通のために、まず相手の言語・文脈の理解が必要で、次に各主体間の“折り合い方”を合意せねばならなかった【1】(【 】は本稿末の参考資料番号を示す、以下同じ)。こうして、主体間の交渉と合意に基づく相対的な関係づけ・取り決め(契約、条約など)を行うことが全ての基盤となっている。そのためには、まず自己を確立することと自己の外部に対する相対化が基本となる。

日本では、例外を除いて歴史的に外界との(特に直接の)接触が殆ど無く、一般人は生まれた土地で一生を過ごし、国外は勿論、国内の他の地域(の人達)との接触も無いのが普通であった。これにより通常生活の場は同一言語で意味・文脈が共有され、特に説明しなくとも誤解なく通じるため、意思疎通に多くの情報が不要となった(主語の省略、指示代名詞の多用など)。この世界では、個人の集団・社会との折り合いのつけ方は、西欧とは異なり、所与で無変化の環境と所属集団への適応が基本となる。社会の基本は「内部の決まり、しきたり」であり、折り合いの基本は「集団のルールを守る」ことになり、自己の確立や相対化とは無縁になる。

こうして、西欧では外部との交渉、日本では内部への適応となる。

(2) 成す vs 成る

上記のような環境は、以下の特徴に繋がる。

西欧では、他動詞と能動態が基本である。すなわち、「何が何に何をするか」、「物事は成すもの」が基本となる。個人が周囲の状況を、自ら観察・把握して、自分自身の意志や評価・判断に基づいて行動を決定し、「主体的に思考し、行動する」ことが必須だからである。

物事は自然に“成る”ものではなく、誰か／何かが“成す”のであり、「自然」であってもそれが持つ力（神）が成すと考える。民族が移動し、新しい土地を開拓するような世界では、自己の力と関係者の協力（個人と集団の統合）が頼りであった。これが「社会を変えるのは自分」という意識を持ち、行動に移す原動力となってきた。これは、「人間の都合で自然をも変える権利がある」という考えに繋がっている（注）。

（注）聖書に、「神が『我々にかたどり似せて人間を作りすべてを支配させよう』と言われた」とある。

日本では、自動詞と受動態が基本である。「何がどうなる」「物事はなるもの」が個人の考えと行動の原理だからである。即ち、物事は自然に決まっていき、与えられるものと理解される。これは、自分の意志には関係ない。とはいえ他から動かされているという理解でもない。「主体的」の反対語は「受動的」であるが、単に“される”意味の受動でなく、世の中は自然に流れるという世界観にも基づいている。

一方で、急速に変わることがあるのも日本の社会の特徴の一つと言えようが、理由は内部変革ではなく、外部からの圧力・環境の急変が要因となっている。時に諦め、それが自分の考えだと信じ込んだり、意図的に信じ込ませることも起きる。これは、人間も自然の一部という自然観とも繋がっている。

以上の議論は、生命維持のため常に動き回らねばならない狩猟民族（自分が行動することが基本）と、耕作地の準備から収穫まで1年間天候頼みで待つ生活を送る農耕民族（自然に任せることが基本）の相違として議論されることも多いが、本稿では省略する。

こうして、西欧では「台風が災害をもたらす」「お皿を壊した」だが、日本では「台風で災害が起きる」「お皿が壊れた」となる。

(3) 客観 vs 主観

前記の議論は、言語学の文献によれば、「客観的表現」対「主観的表現」ということに通じる（例えば【2】）。即ち、

欧米では、自分の外に出て「外から見える」ことを表現する「客観的表現」が使われる。これは、(1)項での議論の「まず自己を確立することと自己の外部に対する相対化が基本となる」ことが理由である。

一方、日本では、「自分から見える／見えた」状況による自分の感情・判断の「主観的表現」が使われる。これは、(1)項での議論「所与で無変化の環境と所属集団への適応」が相対化を排除し、自然と「その中で見て、見えることを理解する」ことでよい行動様式に繋がることによる。

なお、【2】では、日本語での受け身表現は、「話し手のコントロールの及ばないところで何かが発生し、かつそれが自分の方にベクトルが向いている」ことに依っていると論じている。このことは、上記の(2)項の議論と符合する。

客観と主観とが相互作用するところを「場」として考える「”場”の共有の有・無」という論がある(例えば【3】)。即ち、異民族同士のような、“場”を共有していない場合には相手に自分の立場を説明する必要があるが、共有していれば改めて説明の必要はない。(1)項の議論で触れたように、西欧は非共有であり、日本は共有である。なお、【3】によれば、「日本語は自己中心的であると表現される場合があるが、自己中心的なのではなく、自己が置かれている場中心的なのである」。

主観的な表現は当然ながら情緒的表現に繋がる。客観的な表現では、私情は排除される。

(4) 開放 vs 閉鎖

さらに、上記のことから、以下のような個人と社会の関係の相違が認識される。

西欧(特に米国)では、個人が生活していく際に生じる諸問題は“社会の問題”と捉えて、問題を抱える個々人が社会の中で自立でき、共存できる社会的な仕組みを作り改善しながら社会を構築してきた。例えば、障害、貧困などの問題は、これを抱えた人だけの問題ではなく、自分に起きうる問題として、社会の仕組みを造るのである。個人が社会を構築し、社会が立場の異なる個人を包摂するという考え方がその基本にある。これは様々な人が社会を創っていく多様性を保証することにもなる。

これに対して日本では、既に存在する社会の仕組みを枠として、これを外れることは本来社会の問題であっても、その問題を抱える個人の問題(自己責任)とする。この固い仕組みが、変化に弱く、多様性を排除し、“out of box”で考えられない要因となっている。そして、これが教育に公的投資をしない要因の一つとなっている。

こうして、西欧では「人が社会を形成して」きたが、日本では「人は社会によって成形されて」きた。

(5) 責任

以上の議論内容に起因する現象として、日本では同調・同化できない／しない者は排除し、差別に繋がる(いわゆる村八分)。このため、常に大勢・主流の中に自分が居るようにして身の安全と精神の安定を図る。自分が関係する件で不祥事が発生した際には、責任をあいまいにし、穏便にすませようとする。一方で、自分が直接関係せずに社会的に注目された件については、徹底して一斉に犯人捜しをする。また、失敗や不都合については、そのこと自体についてよりも、これを起こした当事者を責め、差別的な言動をとる。COVID-19感染者を激しく責めるのもこの精神性から来ている。特に、SNSなどの最近のネットコミュニケーションの普及により、その速度も程度も極端化している。

これは、日本でイノベーションを妨げている最も大きな要因の一つである。

欧米（特に米国）でも、最近の分断の拡大による現象として、意見の異なる者（集団）を敵視し、攻撃することが目立つようになっているが、相手が社会的弱者である場合は、同様に差別として現れてくる。欧米では、異論を尊重し会話と対話で問題を解決することが基本であり、これがイノベーションの原動力となってきた。何が起きているのかについては、以下で若干考察する。

2. 最近の事象について

(1) 格差と分断

ネット・IT社会の進展によって、格差と分断が急速に拡大している。欧米では、これらに難民・移民の問題、さらには COVID-19 の拡大が絡み相互に折り重なって、より複雑化している。「私が第一、今の自分の幸福」「対外関係は全て取引」「敵か味方かで峻別」での行動が、フェイク情報の氾濫によって増幅され極端になり、種々の対立が目立つようになっている。欧米の基礎であった「個人の問題を社会の問題として、社会問題を解決する仕組みを造る」が、果たしてこのような状況においても有効に機能するのか、どう変化するのか、大きな懸念がある。

米国は、移民で造られた合衆国であるが、建国時には上述の英国と欧州での（男性社会の）原理・価値観に基づくアイデンティティを持つ集団だけであった。（当時、黒人を中心とする奴隷は「モノ」であり「人間」ではなかった。権利から見ると政治的には婦人も同様で婦人参政権が発効したのは1920年である。）

その後、西欧以外からの移民が増えたが、これらの移民は上記の価値観を受け入れる（暗黙に出自の価値観は棄てる）条件で社会に入っていた。しかし、その人数が増えると、建国時のグループとはもともと異なる「自分達の」アイデンティティを持つ集団の文化・価値観を意識するようになる。これは子孫にも引き継がれ、ルーツの異なる複数の集団を形成する。これが分断の大きな要因の一つとなっている。

さらに、これらの集団の相違が支持政党の相違と結びつき、特に米国での政党支持層の分断は、ここ数年、特に2016年の大統領選挙を経てさらに顕著となっている【4】。

日本においても欧米ほどではないが格差と分断は問題化しており、上記の(5)のような風潮が目立つようになっている。どういう社会を作っていくのか、そのためにどのように対応していくか、大きな課題である。

(2) COVID-19 の影響

最初にお断りしたように、本稿では COVID-19 の影響については考察できていない。何よりも考察するにはまだ早すぎるが、日常が失われ、様々な変化が起きており、上記の問題はさらに極端化する恐れがある。現在進行中の変化のどれが新常态（new normal）となるのかは現時点では見通せない。新型コロナ禍が収束した後に（収束するとして）社会は、個人の在り様は、そして世界はどうなったのかを、考察できる日が来ることを希望している。

コロナ禍は、弱者への不寛容と攻撃による打撃が大きく、さらに格差を広げる。西欧では、移民、文化、格差と分断、などの要素がありこれらの影響が、従来の議論を一層複雑化させている。

欧州では、経済と移民増の問題が主要因と言われている。従来、移民する者は、自己のアイデンティティと受入れ国の規範・価値観とを個人レベルで整合させてきた。これに対して、近年の難民を含む移民が増加したことにより、これらの人々が集団として元々持つ規範・価値観との軋轢が表出するようになったことが問題の要因となっている。

特に、米国については、COVID-19 の猛威とともに、上述した党派・格差による分断が顕著となっている【4】。米国の動向は現在、将来の世界に大きな影響を与えるため、この分断をどこまで修復できるのか、折り合いはつくのか、が大きな懸念事項である。

日本では、1項で議論した特質により、同調、自制、忖度などへの社会的圧力が一部においてだが、極端化する傾向がみられる。

今ほど国際協調が重要な時期はないが、世界の潮流はむしろ反対の方向であるように見える。グローバル化が完全に元に戻ることはないであろうが、今後は、自国、自州、自県中心の「ボーダー化」も進むとの予想がある。

人間の基本は「触れ合い・協働」であり、これで社会を形成してきた。「移動・接触の制限」で、今後人間と社会がどのように変わるのか。何が新常态になるのかが判るには、相当長い年月がかかるであろう。

「自分の国だけの平和はありえない。世界はつながっているのだから」（緒方貞子）【5】
「平和」を「繁栄」、「安全」、「利益」などに置き換えても同じ。

参考資料

- 【1】 東浩紀：「ゲンロン0 観光客の哲学」、株式会社ゲンロン、2017年4月
- 【2】 橋本陽介：「「文」とは何か 楽しい日本語文法のはなし」、光文社新書、2020年8月
- 【3】 大塚正之、岡智之：「場の観点から認知を捉える」、2012年12月
<http://www.u-gakugei.ac.jp/~gangzhi/wp-content/uploads/2012/12/JCLA2016%EF%BC%88%E5%A4%A7%E5%A1%9A%E3%83%BB%E5%B2%A1%EF%BC%89.pdf>
- 【4】 なぜアメリカはここまで分断したのか 3つの「巨大なうねり」に答えがある、2020年10月6日
<https://globe.asahi.com/article/13789766>
「ライバル政党は『恐怖』だ」 選挙を楽しむ国だったアメリカ、この亀裂はなぜ、2020年10月6日
<https://globe.asahi.com/article/13789150>
- 【5】 国連スピーチ名言・金言集
https://ngo-fsun.org/fsun/famous_quote/

以上

徒然日記(11)

当会特別顧問 石井 孝

「菅首相 行政のデジタル化 システム統合を令和 7 年度末までに」

大変、結構な事である。ただ、こう言った大きなシステムを運営・維持管理する実行組織をしっかりと創って欲しい。これは、言うならば行政そのもののコンピュータ化であり、類例を挙げれば銀行システムのようなものである。いったん手を付けるとシステムは成長・拡大を続ける。システムの開発を伴ったメンテ作業は、際限なく続くものと覚悟しなければならない。下請け任せのいい加減なスタートをしたなら、とんでもないしっぺ返しをくう。管理中心のお役所仕事ではなく、実作業を自ら実行・実施する責任を持った部隊を当初から準備して掛かって欲しい。



「ウェブ・ミーティング」

先日、初めて「ウェブ・ミーティング」なるものを経験させて貰った。世に聴く「ウェブ・ミーティング」とはどんなものか、本当にリモート・ワークなどに適するのか、正直の所、よくわからなかった。

実際に経験してみると、幾分、インダイレクトな感じにもなって、結構、率直な発言が出来る。

全てが「ウェブ・ミーティング」で事足りるとは思わないが、ミーティング・ツールとしては活用の余地が十分あると思った。

「何処へ行った R&D」

我々が勤めを始めた頃を想うと、企業は、自己の礎を築くため大層 R&D に力を入れて居た。特に技術をベースにした事業にとって、これは至極当然な事であった。所がどうであろう、昨今、この R&D という言葉が、我が古巣からも一向に聞こえて来なくなったような気がしてならない。

嘗ての R&D の主たる目的は、ハードウェアを軸にした機器や装置の技術革新を事業経営に取り込むことであった。

社会システムが高度化・複雑化の道を急速に辿る今日、単なる機器や装置の技術革新では事足らず、企業システム全体の高度化・合理化する術としての所謂システム開発の重要性が増してきた。

これに対しては、言うまでもないが洗練されたソフトウェア技術のフォローが不可欠である。兎も角も、技術立国を導いた嘗てのリーダー達は R&D の神髄を十分に理解し、実践に努めて来た。

現代のリーダー達よ、ソフトウェア技術を軸にした新たなる R&D に誠心誠意チャレンジし、新たな技術立国の道を打ち立てて欲しい。

「しぶとくて強い強い雑草」

私の家にはあまり広くはないが庭のようなモノがある。この時期になると、強力な外来種なども混ざった雑草が茂りまくって大変である。手で摘み取れば良いのだが、腰が痛むので簡便な草刈り機で刈とるのだが、またすぐ出てくる。「雑草の如く生きる」などというが、実にしぶとい生き物である。

ただ、可憐な花を身につける草花を無残に刈り取るのは些か抵抗感も覚える。

さて、話は変わるが、このコロナ騒動で航空機業界が大変である。国際化とかグローバル化と言われる波に乗って、ビジネスや観光客の激増で我が世の春を謳歌していた花形業界が今回のコロナで大打撃である。

よくよく考えてみると、このような事は、特に目新しいモノではない。私が世話になっていた電話事業も似たような状況を経験した。

戦後、社会や経済が大きく復興・復旧する中で通信の重要性が急速に高まった。その中で通信の要であった電話事業を独占した日本電信電話公社は、或る意味で我が世の春を経験させて貰った。

所が、通信の自由化とインターネットの急速な普及は通信業界に突如として激変をもたらした。

電話料金は激安となり、電話料収入を主体で飯を食っていた事業は、文字通り泡を食うばかりである。

今、NTTは、我々ロートルOBから観ると、何が何だか分からないぐらいの子会社だらけである。正直の所、司令塔の持ち株会社は、一体何を主体にして事業経営やっているのやら、と思った事も屡々であった。

しかし、ここの所のコロナ騒動でふと気付いた事がある。子会社群を雑草などに喩えたら失礼かも知れないが先輩のよしみで容赦願いたい。

「しぶとくて強い強い雑草」群が茂っている限り、その企業は少なくともまる潰れる事は無い。それらの中には「野に咲け、蓮華草」もあるだろうし、巧く行けば新種の花形に生まれ変わる可能性を十分秘めている種もある筈である。

考えてみれば、名花とよばれているモノも、元をただせば雑草の花であったのだ。

「赤い夕陽の故郷」

ユーチューブをサーフィンして居たら、偶々三橋美智也の「赤い夕陽の故郷」に行き当たった。

学校を卒業して就職し、翌年から名古屋の市外電話を扱う現場に配属になった。

当時、市外通話は今のような自動接続でなく、全て交換手を通した手動接続であった。

その年、東海地方は伊勢湾台風に襲われ大変な被害を受けた。親戚などの安否などを問う通話で輻輳する中、電話回線も台風による甚大な被害を被り、疎通は捗らず、交換台には通話を要求する交換証が山積みになるばかりであった。

何とか峠を乗り切り、輪番勤務の泊まりの作業を終えて、作業着から通勤服に着替えていると、隣で相棒が「赤い夕陽の故郷」を口遊み始めた。

家を離れるのは初めての事で、家にはまだ電話もなく、そちらの被害は如何になっているかもさっぱり分からない。

「赤い夕陽の故郷」が、初めて故郷というものを意識させる歌となった。

「傍観者の時代」を読んで

日本ベンチャーネット社長 エッセイスト 田上 智



日本の経営者はドラッカーが好きだ。ドラッカーはアメリカではさほど読まれないが。「もし高校野球の女子マネージャーがドラッカーの『マネジメント』を読んだら」という小説も出るほど日本人はドラッカーを好んでいる。最近では、國貞克則氏の「現場のドラッカー」がある。自身、アメリカでMBAを取得したが、授業の中でマイケル・ポーターの「競争戦略」にはお目にかかったが、ドラッカーはついに一度も登場しなかった。

ドラッカーに最初に出会ったのは、まだ私が二十代のころの「断絶の時代」であった。これは、むしろ未来学者の著作だとその時は理解した。この未来予測は100%ではないが、相当の割合で当たっている。

「傍観者の時代」(Adventures of a Bystander) を読むきっかけは、一つには、ドラッカーが経営学の生みの親ともいわれてはいるが、果たして経営の経験はあるのか？二つ目は、ドラッカーが経営という分野のみでなくもっと幅広い知識を持っているのはどうしてか？この二つの謎を解くための格好の書物が「傍観者の時代」だからだ。「傍観者の時代」は、まさにドラッカーの自伝でもあり、思想形成の軌跡でもあるからだ。

一つ目の疑問、経営者としても経験はあるのか？について、NO！全くない。ドラッカーの軌跡を見てみると、1909年、オーストリア・ハンガリー帝国の首都ウィーンに生まれた。それより以前、祖先のおおもとは、オランダで宗教書の印刷業。オランダ読みでは、ドリュッカーである。家系的にはユダヤ人で、高級官僚、法律家、医者が多く、父は貿易省の大臣、母は医師である。出身校はドイツのフランクフルト大学、2005年アメリカで没した。職業としては、ハンブルグで商社員、フランクフルトで証券会社のアナリスト、その後、金融記者、大学では、国際法と国際関係を教えている。実に、娑婆で様々な分野を経験している。このことで、多角的な目を養ったのではないかと想像できる。著作としては、1939年に「経済人の終わり」、1942年には「産業人の未来」を刊行。以降、社会に関するものとマネジメントに関する本を交互に世に問うている。「自分は大組織の歯車よりコンサルティングが得意」といっている。私は30代から（アフリカでの泥だらけの経営体験も含む）経営コンサルタントをしているが、日本では、経営者としての経験がないコンサルタントはどうしても敬意を払われたい傾向にある。例えば、実務経験のない中小企業診断士が経営者を前にして講義する場合があるが、なんとなく、遠慮がちな傾向にある。「経営の経験がないのですが・・・」となると「きったはった」の思いを毎日している人間から見るといささか迫力に欠けるのだ。ただ、実務だけの経営者は、個別の経験を一般論の経営論にまで昇華させる能力は余りない。

最近よく言われることだが、日本の経営者の弱いところは、「リベラルアーツ」に欠ける点である。芸術の分野に詳しい経営者はごくまれである。経営者教育を生業としている企業に聞いてみると、リベラルアーツ関連の企画をしても希望者が無くて講座が成り立たないという。一方、日本の著名な経営学の草分け的な人物が、自分の会社を倒産させるという衝撃の事実が相当以前にあったが、それ以来、どうも日本では経営学者は分が悪い。

二つ目の幅広い知識は、育った環境が、ロスチャイルドとはいかないが、裕福な家庭で、様々な知識に溢れた多く人が出入りするサロン的な家であったこと。すなわち、リ

ベラルアーツは、ばっちりである。そして、アメリカで教鞭をとったが、「アメリカという国は、母国にいるより一流の学者になるような環境を与え、学問の境界を超えさせられた」。別の言葉でより簡潔に言えば、「経済学者は企業を経済の観点から見、政治学者は政府機関を政治プロセスしか興味を持っていなかった」と、そこに共通なマネジメント（経営）という概念を導き出せないという悲しさがある。マネジメントは、企業経営のみならず、非営利団体の病院や学校にも当てはまるし、あらゆる組織に応用できる。この考えを推し進めたのがほかならぬドラッカーなのである。マネジメントとは一つの世界観であり、芸術もこれに当てはまる。したがって、リベラルアーツの必要性とは実はマネジメントの重要なファクターなのだ。

題名の傍観者とは、例えば、企業の場合、経営者が役者で、株主が観客。そのどちらでもない第三者が傍観者で、外部のアドバイザーに当たるようだ。ドラッカーはその助言者に該当する。（完）

ニシン御殿残照

日本ベンチャーネット社長 エッセイスト 田上 智

小樽のニシン御殿・青山別館は、なかにし礼の言葉を借りれば、「屋敷全体が宝石」のようであった。創設者である青山留吉は、ニシン漁で財を成し、故郷近くの山形・酒田から宮大工の棟梁ら50名以上の職人呼び、建坪190坪、18室、総工費30億円というとてつもなく贅沢な屋敷を作った。中でも、床や柱は春慶塗、鶯張りの廊下、紫檀、黒檀、を使った書院づくりの床の間、枯山水の中庭など枚挙にいとまがない。自身が驚いたのは安南製の屏風である。

その昔“黄色いダイヤ”とも言われたニシンの魚卵“数の子”だが、おせちの主演でもあった。ただニシン漁そのものは、ハイリスクハイリターンな危険なゲームであり、多くの喜悲劇を生んだ。

網元は、運が良ければ、立派な屋敷が建つし、悪ければ倒産の憂き目にも合う誠に気まぐれな漁である。これは、洋の東西を問わない。

なかにし礼の「兄弟」という小説は、特攻隊あがりの実の兄がニシン相場に手を出し、本来小樽で収穫したニシンを処分すればよいものを、無理して秋田県能代まで運びすべて腐らせ莫大な借金を抱え、小樽の家から一家が追い出される羽目になるという私小説だ。

記憶に残る「カズノコ倒産事件」というのもある。三菱商事の子会社であった「北商」は、昭和五十五年、まだ「黄色いダイヤ」と言われた時代、年末に価格が上がるであろうという見込みの元、数の子を大量に買い占めたものの、消費者の買い控えで消費は伸びず、多額の負債を抱え倒産の憂き目にあった。商社は、需給の見込が失敗すると大損するという典型的な事件だった。

話を戻すと、この目で確かめた小樽の青山別館だが、札幌での講演の帰途、地元の人が案内してくれた。

創設者の青山留吉は江戸の末期1836年に山形県庄内地方遊佐町に生まれた。24歳で北海道に渡り、小樽市祝津で雇漁夫として働いていた。この頃から、青森、秋田、山形から出稼ぎでニシン漁の漁夫がシーズンには多く集まったのだ。

留吉は、わずか1年で小規模ながら自ら漁場を開き、最終的には、漁場15か所、漁船130隻、使用人300人を使うほど拡張し、小樽の三代網元と言われるまでになった。ニシン漁は1年のうちたった4ヶ月ほど、2月から4か月間だけである。なぜ、留吉が成功したのか？4か月の出稼ぎ漁夫の為に近隣の農地を買い上げ、残りの8か月の為に彼らを定住させ、農作業や植林、造園に携わる仕組みを作ったのだ。すると、経験

値の高い漁夫を継続して雇い続けることが出来、生産性が他の網元より高かったのだ。つまり、独自のビジネスモデルを作り上げたのが成功の秘訣だった。

ここで、思い当たるのが、雇われサラリーマンがやがて起業、個人事業主を経て事業を拡張、零細から中小企業、大企業へと成長するにつれ、リスクは次第に軽減されてゆくという事実である。果たして、ニシンが来るかどうか、来ても自分の網にかかるのかわかるか？網の数があれば増えるほどリターンは多くなるし、来る確率も高くなるのだ。

留吉は、1908年、故郷の遊佐に里帰りし、青山本館で隠居生活をおくり、1916年81歳でこの世を去ったが、その前に250町歩の土地を購入、大地主となった。

実は、この留吉、地元の名士・本間家が念頭にあり、実際に交流もあったようだ。本間家は酒田で代々資産を累積、「本間様には及びもせぬがせめてなりたや殿様に」と言われる日本一の大地主だが、なんと千七百町歩を所有し、庄内藩の殿様の16万石を凌ぎ、26万石の中堅以上の大名並みの財産を所有していた。その本間家の本邸が残っていてそれを青山留吉氏の孫娘が訪れたときに魅せられたという話だ。本間家の本邸は、私も訪問したが、幕府の巡検使の宿にもなるほど豪華で、北前船で運ばれた金沢の九谷焼など調度として多数所有する誠に豪勢な造りである。

面白いことに、この本間家、海運や倉庫業、金融などで財産を増やしたのだが、米相場でも大成功し、本間宗久などは、出羽の天狗の異名を持った稀代の米相場師で、「酒田照る照る、堂島曇る、江戸の蔵前雨が降る」とも謡われたほどだ。ある時期に、博打を打っていたわけです。何かハイリスクハイリターンのニシン漁と似ている。

北海道のニシン漁の歴史は古く江戸時代にまでさかのぼる。和人が漁を始める前は、アイヌが自家用に漁をしていたと言われている。ニシン漁は松前藩によって制限されていたが、明治になって自由にできるようになった。まずは、家族経営の刺し網から網元による大規模な定置網漁に代わってきた。取れたニシンは、ニシン粕は肥料に、身欠きにしんと数の子は食用にされていた。中でも数の子は関西を中心におせち料理には欠かせないものとなったわけだ。ところが、昭和30年以降、にわか激減、昭和32年には日本海春ニシン漁は完全に幕を下ろすことになった。なかにし礼の石狩挽歌の歌詞は、ニシン漁の盛衰を見事に表現している。

(一)

海猫（ごめ）が鳴くからニシンが来ると
赤い筒袖（つっぽ）のやん衆がさわぐ
雪に埋もれた 番屋の隅で
わたしゃ夜通し 飯を炊く
あれからニシンは どこへ行ったやら
破れた網は 問い刺し網か
今じゃ浜辺で オンボロロ
オンボロロー
沖を通るは 笠戸丸
わたしゃ涙で ニシン曇りの 空を見る

(二)

燃えろ篝火 朝里の浜に
海は銀色 ニシンの色よ
ソーラン節で 頬染めながら
わたしゃ大漁の 網を曳く
あれからニシンは どこへ行ったやら
オモタイ岬の ニシン御殿も
今じゃさびれて オンボロロ
オンボロロー

かわらぬものは 古代文字
わたしゃ涙で 娘盛りの 夢を見る

ごく最近、ニシンが戻ってきたというニュースがある。2020年2月27日、小樽市の忍路漁港でニシンが産卵のために押し寄せる「群来(くき)」が見られた。群来はニシンのオスが、メスの産卵に合わせて出す精子で海が乳白色に染まる現象だ。小樽市周辺では、稚魚の放流などの取り組みで2008年以降、群来を毎年確認している。

ニシンの食文化はヨーロッパにもある。ドイツやオランダである。特に発祥の地オランダでは、中世まで遡る。魚卵や白子ではなく代表的なものはニシンそのものを玉ねぎとの組み合わせで食したりする。オランダ語では haring, ドイツ語で Hering そして英語では herring である。因みにドイツ帝国の鉄血宰相ビスマルクは巨漢で、大酒豪大食漢、このビスマルクの好物の一つがニシン酢漬で Bismarckhering である。

さて、かつて世界の海を支配したオランダだが、その要因がニシンにあった。オランダの黄金時代と言われる17世紀には、ニシンは一月から三月にかけて荒天の北海西部の漁場で多くのオランダ船の流し網漁で大量に捕獲され、塩漬け、酢漬けにしてヨーロッパ各地に送られ、オランダ富裕化の源になったのだ。おかげでオランダの造船技術も進んだうえ、海運業発展の土台ともなった。ニシン漁は、「オランダ発展の母」と認められるほどオランダにとって重要な産業部門だったのだ。十七世紀のアムステルダム富裕層はニシンがオランダの富の源泉であることをよく知っており、口癖のように「この町は、ニシンの骨で建てられた」と自慢したと言われている。アムステルダムの堅牢な石造りの建造物はある意味「ニシン御殿」なのだ。ニシン漁で栄えたという意味では、東の小樽と西のアムステルダムと言ってよい。(完)

ちょっといい話

日本ベンダーネット社長 エッセイスト 田上 智

もう十年以上も前の話である。地元の商工会の紹介で高齢の自動車修理工場のオーナーから翻訳と通訳を頼まれた。ハワイにいる身寄りのない高齢の女性オーナーが無くなって、主に現地で所有する大型のスーパーの資産を巡ってその遺産相続の関係で当事者間で大いにもめているという。現地の日系人弁護士は、日本語はある程度は解るが、読み書きはだめだ。間に入って話をまとめてくれないかという依頼である。

とにかくハワイと電話でその弁護士と話をすることも時差がある。早朝の4時か5時に起きて国際電話で話を進めた。ある程度のところまで来たときにもう十分だということで、それから全く音沙汰なしとなった。報酬は全く無し、菓子折り1箱だけだったので、苦労した割には報われない仕事だと痛感したが、何せ地元の商工会の頼みだから、引き受けたのだ。

時は流れた。ある夏の昼下がり、ピンポンとチャイムが鳴って妻が応対に出た。私はたまたま昼寝の最中。事の次第はよくわからない。あとで聴くと、栗饅頭、月餅、松の実饅頭と3種類が25個入った段ボールと金3万円が入った封筒を受け取ったという。

その自動車工場の前を自転車を通り過ぎるたびに、この工場の主はケチだったなど若干不愉快な思いがよみがえっていたが、今回「すべて解決した」ということで、若干のお礼ということらしい。自分は既に自動車も所有していないし、およそその修理工場とは縁もゆかりもない。十年の前の借りをこういう形で返してくれたことで、「人間捨てたもんじゃないな」と改めて考えなおした次第である。(了)

南イタリア俳柳紀行(1)

(2020年1月26日～2月3日)

元 JICA シニアボランティア
北垣 勝之

中東に緊張もたらず米イかな

ヴィールス 避けマスクを掛けて旅立つや

この度の南イタリア旅行は決死の覚悟で臨む。年初の米国・イラン激突は戦争勃発の一步手前、ペルシャ湾経由の飛行プラン危険度は急上昇した。10日後事態の鎮静化が見込まれたところで急遽フライト予約、後は成り行き次第と決める。そう思っていたら次に中国発のコロナヴィールス流行の兆し、しかも春節を控え保菌者の大量移動が見込まれる時期でもある。しかし最早出発直前とあって撤退はできない。よっしゃ毒食わば皿まで、五尺の体軀は天命に託し悲壯感を抱いての旅立ちとなる。寒中入りで旅行は閑散期と思いきやメインの観光地は大勢の人波、誰がヴィールスマンか見分けができない。とりあえずマスクだけは持参して行こう。



日常の殻を破りてメタボリック
長旅やジャズ聞き流し暇潰し

旅の目的は云わばと知れた非日常の異文化探検、生温きわが家を脱出して襖ぎの世界に浸り、無垢の心境から心身の新陳代謝を活性化させることにある。けだしこの異次元突入へのフライトは長く冗長である。日頃あまり体験しない音楽に耳傾けたり、漫画や娯楽映画など世俗の若者文化に触れて機上の無聊を慰めるも良し。旅のイントロは沈黙考、ひたすら休養と気力充電に費やす。

テヘランに商機絶やすな商社マン

ドーハではトランジットに多少時間がかかるためラウンジでゆっくり休息と思っていたら、隣のソファに日本人らしき熟年男性、聞けば某中堅商社のテヘラン所長だった。お互い暇潰しに話が弾む。アメリカとの衝突でイラン国内はかなり混乱しているのではと訝しがる私に彼は、イラン革命隊に中国の影(中国軍属数百人が編入)あるも、宗教的にはホメイニ師を中心に統一組織体制が強化され、むしろ治安は安定、親日国としても揺らぐことはないと言う。また女性の開放が進み、今やイラン社会は自由と民主化が風靡しているとも。10数年前私がヨルダンにいた頃の状況とは雲泥の差があるようだ。厳格なイスラム戒律のもと硬直的な内政を想定していたが、現地に2年余り住んできた彼の言は、日本の識者が自慢げに開陳するアメリカンバイアスのイラン観とは相当違う。米軍がイラクでイラン革命防衛隊のソレイマニ司令官を殺害したことに端を発した年初の事件だが、その時は営業案件が途絶えた現地事務所を一時閉鎖、邦人は本人も含め全員帰国した。現地職員は多数解雇するも、将来の営業再開に一縷の望みを託し優秀な現地人6名は首を切らず雇用継続のまま事務所を後にしたと言う。そして今次アメリカ・イラン間の緊張が弛緩した状態を見計らって一人テヘランへ戻るどころだった。戦争が

起きようが起きまいが商社マンたる者、常に機を見るに敏でなければなるまい。事務所に残してきた猫のことが気がかりだと吐露して席を立ち、テヘラン行きフライトの搭乗口に急ぐ彼をエールの目線で送る。

VIP 乗りて一等車両の座席替え

南イタリアの二つの世界遺産アルベロベッロとマテーラを訪れるため、ローマから高速列車フレッチェジェント「銀の矢」に乗ってバーリに向かう。車両は最先頭の1号車のはず、そう思いながらホームの端まで行くと、車掌から座席番号は同じだが2号車に変更になったと言われる。すると先客が指定の席に座っている。あらためて車掌に照会すると私たちに優先権があり、先様を別の座席に誘導した。何でこんなことが急に起こったのか。実は、政界有名人が1号車をまるまる占有したからである。近々行われる総選挙対策のため、当人がカンパニア州のベネヴェントまでお出かけとのこと。噂ではベルルスコーニと言われていたが実に物々しい警備体制であった。車両への通路には二重三重の警備員、食堂車からは特別食の搬入、到着駅でも厳重な出迎え態勢が敷かれていた。隣の車両のVIPに我々は小心翼翼、トイレも後方車のそれを利用することになるが、その都度係官がトイレ室内を検査する始末である。マフィア社会の縮図を見る思いであった。

たまたまアルベロベッロのバス停で出会った現地の中年女性と近づく選挙の話をする。現政権のコンテ首相に代わる人物は誰になりそうか問うてみる。彼女曰く「まずは予備選挙が始まらないと何とも言えない。各州党派の優劣によって代表者は決まってくるそうだが、結果はどうだろうと私は中道左派に投じます。絶対右翼には負けません」と断じる。週二回バーリまで仕事に行くそうだが、彼女のはっきりした意見にバス待ち時間が短く感じられた。それにしても一旦政界を引退したはずの先の大物、再びイタリアを牛耳ろうという魂胆を抱くに至るや。



わがホテルアルベロベッロのトゥルツリ アルベロにジャパンママ得て店繁盛(屋上)

室内は快適

陽子さんの店(左端が亭主)

誕生日発奮ディナーで歳忘れ アルベロに飛驒を重ねて人恋し

やど 宿 トウルツリ快適住居人智かな

My age steps forwards, in Italy year by year, that seems fated on me.

アルベロベッロは、アドリア海に面した港町バーリから南東約 50 km の内陸にある。段丘地帯にトゥルツリ(平石積み円錐形の屋根をした住居)が楚々と佇む街である。1996 年にユネスコ世界遺産に登録され、今では世界中から多くの観光客を集める。でも旅のローシーズンとあって日本人ツアー客を除けば観光客は少なくほっとする。旧市街の趣はどこか飛驒高山の雰囲気似ていて親近感を覚える。トゥルツリのホテルに一泊したが、内部は暖かく設備も充実、居心地が好い。当日はちょうど私の誕生日、旧市街の有名レストランで少々羽目を外して豪遊する。81 歳の齢をアルベロベッロに刻む。

余談だが一年前の誕生日はリグリア海に面するラ・スペツィアで祝った。どうもイタリアで歳をとる癖がついたようだ。第4句は英語発音準拠の英語俳柳。

目が合うて人生開拓新天地 三十年アルベロベッロの人となり

アルベロベッロの旧市街を散策していたら、立派な日本語で「どうぞお入りください」と墨書の店がある。傍にいた青年に聞いたら「うちの母が書きました。屋上からのトゥルッリの眺めが好いですよ。見るだけでもどうぞ」と誘われ、店内を素通りして屋上に出ると、彼の言った通り素晴らしい街並みが一望できた。横浜から来たと言う母娘連れの先客と眺望を褒め讃え合う。この家の熟年夫婦は当地出身の亭主とそこに嫁いだ日本人女性、先の青年は二人の息子だった。彼女は千葉県市川市の出身、約30年前現地に来て土地柄とご主人に一目ぼれ、以来住みついてしまったのだ。「すっかりアルベロベッロ人になったのですね」と言ったら、「でも私の郷里は市川です」とのこと。人は生まれた場所に束縛されるようだ。息子さんは堪能な日本語を駆使して邦人観光客相手になかなかの商売上手、如才なき親父と奥ゆかしい母親、三人の持ち味が活きたイタリア隋一の幸せ家族とお見受けした。

洞窟に原人惚ぶ一夜かな テレビ無き洞穴暮らし平穏なり

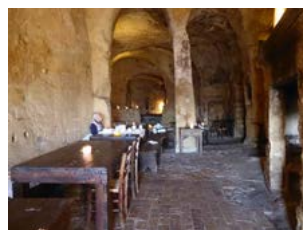
バーリから私鉄アップロ・ルカーネ鉄道で1時間半、マテーラの街はサッシ(Sassi:石の意)と言われる洞窟住居で有名だ。1993年世界遺産に登録されてから脚光を浴びるようになる。この旧市街は溪谷沿いの岩山に掘られた無数の洞窟住居から成り立つ。中世の頃から住みついた住民は零細農民ばかり、作地に恵まれない農家は家畜を飼い細々と自立していく。近世になってブドウやオリーブの協同栽培を行うなど増産に努め、やがて新市街を構築、洞窟から転居して行く。かくして近年、廃墟の洞窟をリフォームして住む人も出始め、ホテル化して観光資産に転ずるようになる。その洞窟ホテルに一泊滞在する。岩肌むき出しの洞穴にはテレビもなければ気の利いた電化製品もない。灯りは三日間保つ蝋燭が主で、あとは非常灯があるだけ。伽藍洞のリビングにはダブルベッドとむき出しの大きな浴槽、机とイスがあるくらい。トイレだけは頑丈な扉で仕切られた小部屋になっている。全体として原始生活をイメージしたホテルである。入口は一つ、重厚な木造の大まかな門扉ではあるが、寒風の侵入はなく室内は暖かい。殺風景な洞窟住居だが、忙しい俗世から解放され、些事末端の雑念も払拭してくれた静かな一夜を過ごす。



私鉄アップロ・ルカーネ鉄道(バーリ駅)



マテーラ旧市街のサッシ群



洞窟ホテルのレストラン



洞窟ホテル室内のバスタブ

なん
南 タリア松にイトスギ原風景

青年の頭刈り上げ松の木も
松杉に加え林立風車群

南イタリアをアドリア海側のバーリからティレニア海側のナポリへとバスで移動する。マテーラを出発した紅い車体のマリノ・バスは、長距離移動のためトイレ付、二階建ての上階前方席に陣取り移り行く風景を愛でる。所々高速道路を離れ立寄る海浜の街、松並木や糸杉の旧街道を快適に走る。内陸に入るとオリーブ畑が一面に広がり、またブドウ畑も多い。オリーブやブドウはむしろ農作には向かない荒地で栽培されているところが多いようだが、イタリア南部もご多分に漏れず農業開拓に不断の努力を積み上げてきた土地柄なのである。段丘の多い地帯では風力発電装置が陸続と現れてくる。ヨーロッパ諸国では一般的になっているエコ・エネルギー源の風車もまた日常的風景の一翼を担う。なお余談になるがイタリアの松は下枝を剪定、ひょろひょろっと伸びた樹の天辺に常緑の葉が繁茂する。最近の若い男性の髪型に似ていて面白い。側面を刈り上げたヘアークットで冠鶴の頭を思い出す。



薄暗き洞窟内にランプの灯(絵になりそう)



マテーラの朝市(新市街)



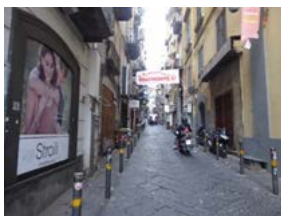
年季入る窯でピザ焼く職人さん



マルガリータを二人で一つ

ここかしこ花が春呼ぶ南伊かな

イタリア南部の春は早い、というか初夏を思わせるような花も咲き出している。春夏の境界がないのかな。これは暖冬異変の影響だけではなさそう。野には菜の花に似た黄色い草花、またエニシダやミモザ等の木花も散見する。そういえば3月8日の世界女性の日も近い。シチリア辺りではミモザの黄花が花屋の店頭にも並ぶことだろう。まずは黄色系の花々が春の到来を告げる。そこにカラフルなハイビスカスやブーゲンビリアなどの夏花が住宅街の庭先に顔を出す。一足早く百花繚乱の春を先取りする。(次号に続く)



早朝ナポリの横道



ヴォメロの丘の露天商



ポンペイ遺跡を案内してくれたコマドリ君



ローマ観光はカモメ君(フォロ・ロマノ展望台)

ウェブサロンの話、あれこれ

第4回 ICT 海外情報ウェブサロン模様

事務局

第4回 ICT 海外情報ウェブサロンが2020年10月31日(土)19時30分～21時、ウェブ会議室において開催された。テーマは「旅の思い出」であり、当会の佐竹幹事を皮切りに、参加者の旅の思い出・考えたことなどが語られた。特に、(一財)日本 ITU 協会の田中専務理事の超技巧カメラワークによるブダペストやバンコクの映像に一同感嘆していた。また、NTTの IOWN 等の新戦略に関する質問・意見が湧き出るなど、サロンらしい自由闊達な場となった。なお、田中様から下記サイトのご紹介があった。

<ブダペスト ドナウ川風景>

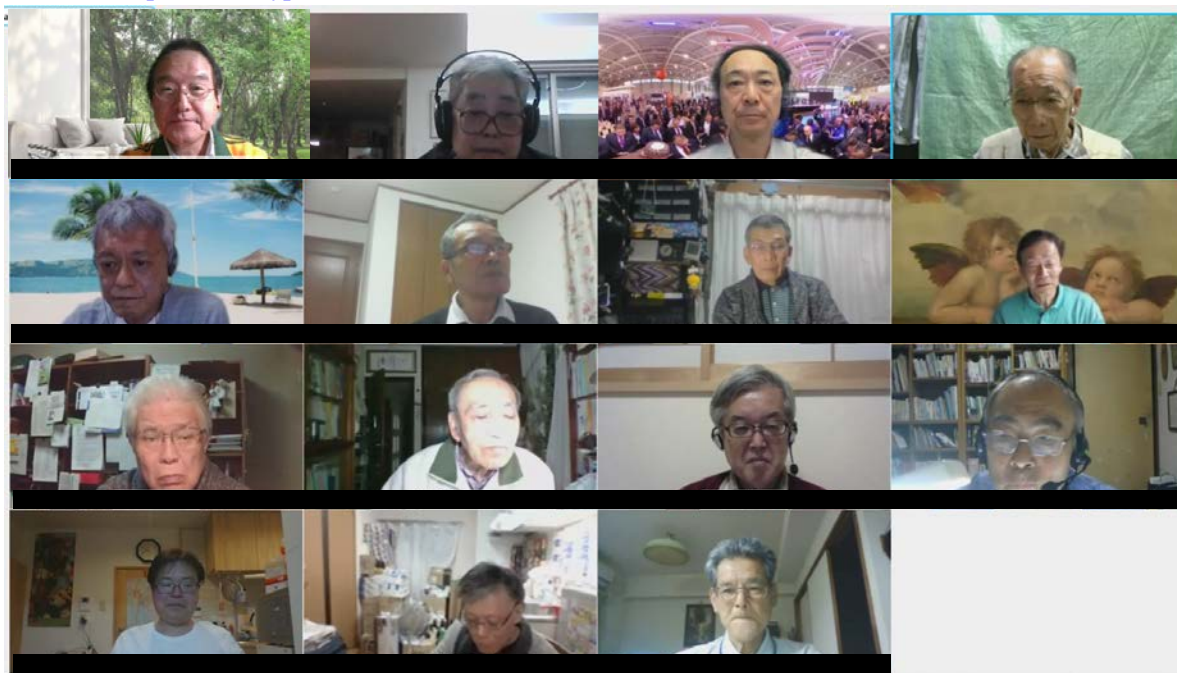
http://www13.plala.or.jp/mml/Contents/20190909_Budapest_Donau/20190909_Budapest_Donau_J.html

<バンコック 風景>

http://www13.plala.or.jp/mml/Contents/20161114_Thailand/20161114_Thailand_J.html

<武蔵野メディア研究所：個人HP>

<http://www13.plala.or.jp/mml/>



お知らせ

第5回 ICT 海外情報ウェブサロン開催のご案内

事務局

ICT 海外ボランティア会(ICTOV)による第5回 ICT 海外情報ウェブサロンを下記のとおり開催いたしますので、ご多忙とは存じますが、奮ってご参加くださいますようよろしくお願い申し上げます。

1. 日時：2020年12月12日(土)19時30分～21時(日本時間)
2. 場所：ウェブ会議室(Webexを使用)
3. テーマ：「2020年を振り返って」
4. 参加費：無料(会員制ではなく、どなたでも参加できます)
5. 定員：100名(先着順)
6. 申込方法：参加ご希望の方は、下記連絡先にご氏名及びウェブサロン参加希望の旨をご連絡ください。
<連絡先> ICTOV事務局 info.ictov@network.email.ne.jp

☆オンライン忘年会として、参加者の本年の思い出・成果・失敗談などについてご紹介いただき、ご自宅等にしながら気軽に楽しく、来年への英気を養い合うものです。

(注)ウェブ会議室(Webex)への参加方法は次のとおり簡単です。パソコン(カメラ・マイク付)、スマホ、タブレットのいずれでも可能ですが、パソコンが簡単で見やすいのでお勧めいたします。

- ①Webex Meetings アプリ(無料)をインストールされていない方は、事前に下記サイトでWebex Meetings アプリをダウンロードし、インストールする。

<https://www.webex.com/ja/downloads.html>

その後、下記サイトでご自身の映像が見え、参加できることをテスト通信・確認し、当日を待つ。

<https://www.webex.com/ja/test-meeting.html>

- ②当日開始15分前までに、ウェブ会議室サイトの案内が参加申込者あてにメールで届くので、メールで指定されたウェブ会議室サイトをクリックする。その後、お名前(表示用)、メールアドレス(登録確認用)を入力し、参加ボタンをクリックして入室する。

編集後記(編集者から一言)

皆様のご協力をいただき、おかげさまで会報第95号を発行することができました。今回は当会の吉田顧問(東京大学名誉教授)から「個人と社会」、また北垣様から新たに「南イタリア俳柳紀行」のご寄稿をいただくとともに、徒然日記、海外グラフィティのご寄稿も継続していただき、誠にありがとうございます。

ウェブ会議室を活用し、全国・全世界から参加できる「ICT海外情報ウェブサロン」は4回目を開催し、運営も少しずつ慣れてきたように思います。ご参加の皆様のご協力に感謝するとともに、第5回開催もご案内しておりますので、多数の皆様がご参加くださいますようお願い申し上げます。

当会及び当会報へのご感想、ご意見などございましたら、下記サイトにご記入いただければ幸いです。皆様からのさらなるご寄稿をお願いするとともに、今後とも当会へのご指導・ご支援を賜りますよう、よろしくようお願い申し上げます。

<https://ictov.jimdo.com/コメント/>

発行： ICT海外ボランティア会(CTOV)
会報担当： 空席のため募集中(編集長兼広報部長)、山川 博久(事務局長)
ホームページ担当： 山崎 義行(報道部長)、安達 信男(幹事)